

特集

ものづくりの原点に挑む 新たな和紙の可能性を求めて

堀木 エリ子氏

和紙作家で「上野原縄文の森展示館」エントランスホールドーム・天井オブジェも制作された、世界的に活躍されている堀木エリ子氏に2月19日、ご講演いただきました。

バカラなど世界的な企業とコラボして作品を創るなど、活躍する堀木エリ子さん。これまでの常識を覆す巨大な手漉き和紙や鉄を漉き込んだ和紙は、建築・インテリアなどに採用さ



れ、風情あるダイナミックな空間演出で見る人をひきつけます。

「腹の底からの パッション」が大切

「仕事を続けて四半世紀。ずっと戦いでした。それでも続けてこられたのは、人との縁があったから。人生〓仕事において一番大切なことは、人との縁だとつくづく感じます。もう一つ大切なことがあります。それは「腹の底からのパッション」です。せっかくなご縁をいただいても、本人に情熱がなければ広がっていきません。また情熱は持つていたとしても、日々の中ですぐ折れたり、なえたりしてしまいます。情熱でここまで走ってきた私も、『どうやってもう一



プロフィール

「建築空間に生きる和紙造形の創造」をテーマに、2700×2100mmを基本サイズとしたオリジナル和紙を制作。和紙インテリアの企画・制作から施工までを手掛ける。近年の作品は「東京ミッドタウンガレリア」「パシフィコ横浜」「在日フランス大使館 大使公邸」「成田国際空港第一ターミナル到着ロビー」「上野原縄文の森展示館エントランスホールドーム・天井オブジェ」のアートワークのほか、N.Y. カーネギーホールでの「YO-YO MA チェロコンサート」の舞台美術等。著書に「和紙の光景―堀木エリ子とSHIMUSのインテリアワークス」(日経BP社)、「ERIKO HORIKI-Washi in Architecture」(スペイン、トリアングラ・ボスタル社)、「和紙のある空間-堀木エリ子作品集」(株式会社エー・アンド・ユー)、「和紙作家 堀木エリ子の生きる力」(六耀社)がある。

度パッションを立ち上げるか』『どうやって新しいパッションを見つけるか』とずっと悩み続けてきました。」

和紙との出会いと初めての挫折

「OL時代に通っていたディスプレイで、常連の「おじいちゃん」に言われました。『あなた、勤めは銀行やったな。だったら経理ぐらいできるやろ。今度息子が京都で会社を始めるから、手伝ってくれへんか』。そこは手漉き和紙製品の商品開発の会社でした。越前和紙の里である福井県の紙漉きの現場へ見学に行かせてもらったときのことで。薄暗い工房の中、黙々と作業にあたる職人さんと出来上がった和紙を目にして、感動と

いう言葉では言い表せないものが自分の中に湧き上がってきました。1500年もの間、この尊い営みが受け継がれてきたのです。

会社はおしゃれな商品を作っていて、評判も良かったんですよ。ところが半年、1年たつと似たような商品が大量生産されて安く出回ってくる。そんな状況に会社は太刀打ちできず2年後、倒産してしまいました。」

「天職」とは決心して 覚悟するって

「伝統を絶やしたくない一心で、和紙の仕事が続けられるようにいろいろな方をお願いしましたが、うまくいきません。そのとき『自分でやるしかない』と思ったのです。さて、決心はしたけれども、アートの勉強をしたわけでもない、ビジネスの勉強をしたわけでもない、お金も持っていない私は途方に暮れました。そんなとき前の会社の社長が、人を育てることに理解のある呉服問屋の社長さんを紹介してくれ、同社の一事業として和紙事業部が立ち上がることとなりました。」

わからないときは、 原点に戻る！

「なぜ前の会社はつぶれたか。手漉きの和紙は大量生産のものとのどこが違うのか。ひたすら考えました。そして気づきました。手漉きの和紙は使えば使うほど質感が増し、劣化しにくい性質を持ちます。ところが前の会社では祝儀袋やレターセット、ラッピング用紙など、1度使ったら捨ててしまうものを作っていました。それでは安い大量生産のものに負けてしまうのは当たり前。最初から戦う土俵が間違っていたのです。そのとき私は、建築・インテリアの分野で和紙を使ってもらおうと方向性を決めました。」

腹の底からのパッションが 人を動かす

「それまでなかった畳3帖分もある手漉き和紙を作りましたが、はじめはみんな『誰が買うねん』と冷やかな反応でした。光で表情を変える和紙は、時や季節のうつろいを感じる事ができます。であれば和紙

と光を組み合わせることによ
り、日光の届かない地下街やビ
ルの密集地にあるマンション
でも、うつろいを感じる空間が
つくれるはず。この素晴らしい
資材を広く知ってもらいたい
い！ 人がたくさんいる東京
で展覧会を開こうと思いつき
ました。著名な作家さんに『こ
れまでにない大きな和紙を
使って遊んでもらえませんか？
デザイン料は出せなくて申し
訳ないのですが…』とお願いし
たところ、快諾してくださった
こともあり、展覧会は大成
功でした。」

1年目は3000万円 もの赤字

「意気揚々と京都に戻った私
を待っていたのは、怒った社長
でした。和紙事業部は1年間で
3000万円の赤字を出して
いたのです。すぐ辞めろと言
う社長に、『石の上にも3年と言
うじゃないですか』と訴える
私。最終的に出された条件は
『2年目も赤字だったら、借金
を背負って出ていけ』でした。
『困ったときは原点へ戻れ』

が私のモットー。太古から人々
は埴輪や土偶を作り、自然や命
に対する祈りをささげてきま
した。それは学校で習ったもの
ではありません。一生活者が
作ってきたのです。人はみなク
リエーターだと気づいたとき、
『私にもできる』というパッ
ションが沸いてきました。その
後、赤字を回収して独立しまし
たが、『ビルに燃えるものは使
えない』という消防法の規制に
ぶち当たったときも諦めませ
んでした。そのことが『燃えな
い』『汚れない』『破れない』『色
あせない』という弱点を克服し
た和紙の開発にもつながりま
す。」



自分の前例は自分で つくと決めた

「時代の要望が技術開発の
きっかけとなったことを振り
返ると、伝統も進化させてい
なければならぬと強く感じ
ます。最初は職人さんから『あ
なが作ったものを和紙と呼ん
で』と言われたことも。私が
やっていることは伝統を壊して
いるのだろうかと思っていました。

立体的に漉いた和紙でオブ
ジェを作ったり、実際に走る和
紙の車をドイツのハノーバー博
覧会へ出展したり。全部『財産は
無知』と周りの人に聞きながら
いろいろやってきた結果です。
チャレンジするためには、和紙
の世界だけを見ていてはだめ。
いろいろなものを見て、実際に
触れて。日常の小さなことから
行動して、次のステップにつな
げていけたらと思っています。」

